

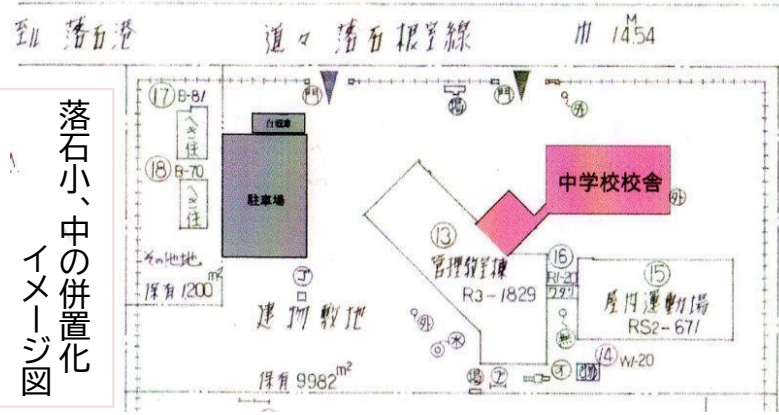
落石中学校の小中併置化 保護者や地域との協議で 合意が前提と説明

12月2日、根室市議会の文教厚生常任委員会（工藤委員長）は、議員協議会を開催し、市教育委員会が検討している落石中学校の小中併置化に向けた考え方について、説明をうけました。

市教育委員会は、先日「令和5年度から落石小、中を併置化する方針」と新聞報道されたが、方針は未だ決定していない、とのことでした。

今後のスケジュールは、保護者や地域から合意が得られた後に、市行政内部や議会での論議を経ながら進めていきたい、と説明しました。

市教委は11月中旬に地域やPTAを対象にした説明会を開催。これまでの説明会等では特に反対意見はなく、地域からは今後の災害に備えて、対応を急ぐべきとの意見が出されたそうです。



落石小、中の併置化イメージ図

耐震工事が出来ない校舎

築51年が経過する落石中学校は、コンクリートブロック造で、専門家による調査で耐震性能に疑問が残るとされています。しかしブロック造建築物は耐震補強工事の工法が無く、どのような対応をするべきか、これまで大きな課題でした。

市教委は校舎の現地建替えも検討したそうですが、工期が長くなることやプレハブ仮校舎の建設等による経費の増大、また工事上の安全性の課題があるために、小中併置化を基本に進めたい考えです。

教職員の配置等は？

今後の生徒数の減少により、落石中学校は令和11年度から教頭・事務職員、養護教諭が再び、配置出来なくなる見通しです。小・中を合計した職員定数は、併置化しても同じですが、養護教諭等が小学校と兼務出来るため、配置や運用の幅が広がるそうです。

その他、小中一貫教育として、小学校への乗り入れ授業の実施が可能になること等、市教委が考える併置化の利点を説明していました。

地域の将来や子ども達が学び育つ環境を守るために

校舎の耐震化は急がなくてはなりません。その上で、どのような方法だと、将来にわたる子ども達がより良い環境で学び育つことが出来るのか、地域も議会も、今後も多角的な検討をすることが必要です。

根室市が「通所型入浴サービス事業」を12月から開始

根室市は通所型入浴サービス事業を12月からスタートさせます。関連する補正予算が11月27日の根室市議会緊急議会で可決されました。

現在、社会福祉協議会が訪問入浴サービスを実施していますが、看護体制の困難から、11月から訪問入浴サービスが休止となっていました。現在29名が利用しており、長期間のサービス休止が続けば大変に厳しい状況でした。

そのため、市では急遽、はまなす園に依頼して、休止しているデイサービスの施設を利用して、通所型入浴サービス事業を実施しました。訪問入浴サービスの看護職員の体制が整うまでの代替措置です。

サービス提供の流れは、社協の移送サービス車で利用者を搬送し、はまなす園で入浴後、帰宅します。入浴業務は社協の職員が行い、血圧測定等や、緊急時の対応をはまなす園の看護師が行うそうです。ただ胃ろう部の対応や吸引、褥瘡処置など医療的な処置は、家族が行うことを基本としており、可能な限り家族の同行を求めています。



市担当課によると、これまで訪問入浴サービスを利用していた本人・ご家族の意向調査では、うち半数以上が新規事業を利用する見込みとのこと。この事業が安全に安定的に実施されること。そして何よりも一刻も早く、本来の訪問入浴サービス再開に向け、体制が整うことを願います。

根室市在宅医療介護連携推進協議会が一般市民向けに開催した「VR認知症」の体験会に参加しました。

ヘッドギアとヘッドフォンを装着し、認知症の方がどんな世界を見ているのかを、VRで体験する研修です。これまで認知症について学ぶ機会は何度もありましたが、実際のところ「なんとなく」しか理解していませんでした。VRで経験することで、認知症の「共感」とはこういうことか、と驚きました。



VR（バーチャルリアリティ）を使って「認知症」の体験をしました

11月18日

「車から降りて」と言われても、自分が今ビルのような高さに立っているように見えて足が踏み出せません。見ているモノが現実なのか、幻覚なのか区別がつかません。自分が今どこにいるのか分からなくて困っているとき、誰かに優しく声をかけられたら、どれほど安心するのか…。

認知症の方に対応するときには、「どう思っているのか」「どうしてほしいのか」を、まず認知症の方自身に話を聞いてほしい。VR映像による疑似体験を経たことで、講師の説明が大変よく理解できました。

今後も機会があれば、出来るだけ多くの市民の皆さんに体験してほしい研修と思います。